平成 29 年度

茅野市議会経済建設委員会研修視察報告書

（ 経済建設委員会 特定事件継続調査報告書 ）

- 研修期日
  平成 29 年 10 月 18 日(水)、19 日 (木)、20 日(金)

- 調査対象
  - 長崎県北松浦郡小値賀町
    1、観光による村おこしについて
    2、DMOの現状について

  - ＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会
    1、おぢかアイランドツーリズムについて
    2、DMOの事業について
    ⑴ 民泊（おぢかアイランドツーリズム）
    ⑵ 古民家ステイ（おぢかアイランドツーリズム）

- 参加委員

委 員 長	小池　賢保
副委員長	長田　近夫
委　　員	小尾　一郎
委　　員	矢島　正恒
委　　員	篠原　啓郎
委　　員	望月　克治

- 市随行者

産業経済部長	五味　正忠
議会事務局員	五味　利夫

長崎県 北松浦郡 小値賀町

- 調査項目
  1．観光による村おこしについて
  2．DMOの現状について

- 調査対応者

小値賀町議会議長	立石 隆教 氏
産業振興課商工観光係長	永田 敬三 氏
議会事務局長	尾野 英昭 氏
議会事務局書記	森 知佳 氏

- 調査期日
  平成29年10月19日　午前9時30分～午後0時4分

- 小値賀町の概要
  人口：2,511人　　世帯数：1,274世帯（平成29年10月02日現在）
  行政面積：25.53㎢（大小17の島で構成）

茅野市との比較

	小値賀町	茅野市	
面積：	25.53㎢	266.59㎢	(10.4倍)
人口：	2,528人	55,890人	(22倍)
人口密度：	99人/㎢	210人/㎢	(2.1倍)
歳入決算額：	35.87億円	237.86億円	(6.63倍)
歳入市税：	1.6億円	83.4億円	(52.1倍)
地方交付税：	18.3億円	43.8億円	(2.4倍)
歳出決算額：	34.59億円	227.29億円	(6.57倍)
歳出一人当：	137万円	41万円	(0.29倍)
交通：	船　海路,	車・鉄道　陸路,	

- 調査目的
  1．茅野市では、茅野版DMO（観光を活かしたまちづくり）事業がスタートした。観光によるまちづくりのモデルとして事例説明を受けている長崎県小値賀町の現地を視察し、茅野市としての観光によるまちづくりのポイントを整理する。
  2．DMOの目指す「観光を通して持続可能なまちづくり」や、「地域のあらゆる産業と人々が一丸となり、茅野市らしさを見つけ出していく」そして『茅野市が好きなファンを増やしていく』ために、先進地である小値賀町を視察する。

- 調査内容
  1．観光による村おこし・DMOの現状について
  【小値賀町からの説明】（永田敬三氏説明）

・体験型観光の取組、発端は野崎島にある簡易宿泊施設「野崎島自然学塾村」（廃校になった小値賀中学校野崎島分校の校舎を改修し活用）。平成10年から12年にかけ環境省の「ふるさと自然塾」事業を活用し、野崎島での体験事業について検討と試行を行う。本格的体験プログラムを提供できる任意団体「ながさき島の自然学校」を平成13年に設立。都市との交流拡大、農家や漁家に直接宿泊してもらう宿泊形態を提案した。平成18年に「小値賀町アイランドツーリズム推進協議会」を設立。「民泊」（農林漁協体験民宿）の取組が始まる。平成19年に「小値賀町観光協会」「ながさき島の自然学校」及び「小値賀町アイランドツーリズム推進協議会」の3者を統合して「ＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会」を設立しツーリズム事業の推進を計る。小値賀町内での体験事業及び民泊、観光情報の案内に関するワンストップ窓口として業務を行う。
・体験型観光の現状は、自然体験、民泊、古民家事業の3本柱で行っている。
・民泊事業や体験プログラム事業の充実とツーリストの増加により、注目される。「ＰＴＰ（ピープル・トゥ・ピープル・アンバサダー・プログラム）アメリカ交際親善大使プログラム　世界№.１表彰」（2年連続）など、ＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会が全国規模の表彰を相次いで受賞。関係者の自信につながった。
・古民家ステイ事業を始める段階で、観光事業を地域の基幹産業としてやって行こうと言う事で「株式会社 小値賀観光まちづくり公社」を作り。古民家事業はそこが指定管理者になって行っている。
・現在は、高砂氏が抜けたことまた、公社の事業を引き継いでいる事などから、マンパワー不足となっている。働いている人のモチベーションも有るかと思いますが、踏ん張りどころである。
・小値賀らしい観光を推進していくには、小さな島なので、町が同じ方向に向いて各産業が協力して、第1次産業だけでなく、観光だけでなく、行政だけでなく、皆が繋がって一つのまちづくりをすることで、魅力ある観光地と言う位置づけになるのではと考えている。
・平成25年からは、観光省の事業で『「海風の国」佐世保・小値賀観光圏』を、今年度まで5カ年の事業を行っている。情報発信とか観光版の整備とかですが、課題はやはり人的課題です。ガイドの育成、地元をまとめるリーダーがまだ育っていない。ソフト面を充実させていく必要がある。
・ボランティア組織としては、一番古くから継続させているのが、17回目を迎える「長崎おぢか国際音楽祭」の実行委員会が、実行委員会組織で行政主導では無く、民間の人たちが音楽祭を運営している。
・地元の若手で組織しています「チームおぢか島ん」地元をテーマにしたヒーローショーなどを行って、町内外のイベントに出ている。
・地産池消と食育の推進として、通称「ふるさとの味・かーちゃんの味つたえよー会」、地元のお母さん達が、小中高校生に段階的に郷土料理を教えている。
・東日本大震災をきっかけに、これまで培ってきたアイランドツーリズム事業を活かして、小値賀の自然の素晴らしさ、島の人の優しさ、歴史文化の特異性を通じ、子供たちにゆっくり過ごしてもらう受入れ実行委員会として「こんねおぢか島」を設立した。
・小値賀町は海流や季節風等の影響から頻繁にゴミが漂着する。ふるさとの海を綺麗にしようと月に1度、海岸清掃や園地清掃を行う。地元の若手20代やＩターンの方が中心になって組織した「リッパカンパニーズ」である。
・女性消防団は長崎県では一番最初に組織された。消防団活動には参加しつつ、夏場の救急蘇生法の講習なども指導が出来る自発的活動も生まれてきている。
・長崎県で唯一「日本で最も美しい村」連合に加盟している町で自慢の１つ。住む私達が自ら島

に誇りを持って、次世代にこの環境をしっかりした環境のままで次へ継承する取組を、自分たちでやる事を提唱していく事が大事と考えている。

・定住促進について、総務省の「地域おこし協力隊」や「地域おこし企業人」と言う事で、東京の大手企業の職員が、小値賀町の地域おこしのために、主に空き家対策ですけれど来ていただいて地域おこしに参加していただいている。

・小値賀町は小さな島ですけれど、小さいを逆手にとって、“小さい島家族”です。島全体の絆を大切に、小値賀で働く、小値賀で子育てする、小値賀で人生の最期を見送ってやれるような、持続可能な温かい町を展開していこうと考えている。

【質疑応答】（永田敬三氏回答）

Q：民泊をやるにあたり、他人が家に泊まることの抵抗や家族の理解について。

A：平成18年に７軒の小値賀の民家さんが、小値賀の観光振興のために何かやれないかと、先行して民泊事業をやられていた長崎県松浦市へ実際に視察に行って実体験されています。その中でこれだったら私達にもできると実感して帰って来て直ぐにもやってみようと言う事になりました。
小値賀の人達は交流好きで、昔から「トクドン」といって、親戚では無く、顔見知りの他人の家に、農家が忙しい時には、稲刈りの応援に泊りがけでやらせる文化が有り。他人が家に泊まる事にあまり抵抗は無いと思う。

Q：旅行社（おぢかアイランドツーリズム）との間の契約内容について。

A：修学旅行の誘致をするに当たってＪＴＢとの契約が有った。

Q：緊急時（災害、病気等）の対応やその訓練、勉強会等について。

A：民家さんには、「対応マニュアル」を作って渡してある。また、修学旅行のお子さんが来る時には、対応マニュアルを再確認を行い、特に周りが海なので夏場に入る前に、蘇生法の講習会と６月に衛生講習会を毎年行っている。また、初期消火訓練もやっている。

Q：障害者等の受け入れについて。

A：島に渡って来れることが最低条件なのですが、特別拒否とかはせず対応している。今の所可能な範囲で対応はしている。

Q：高価路線方針に至った経緯、高額路線で行けるという判断に至った経緯は。

A：古民家事業するに当たって、新しいお客さん層を狙って、差別化しなきゃいけないと言う事で、古民家ステイ事業を機に価格設定、差別化して、ターゲットも有る程度富裕層で、お金と時間のある方を狙ってやっている。また、地元の旅館、民宿とも競合が無いように配慮し

て、価格差が必要と言う事でその点にも配慮した価格設定をした。

Ｑ：従事者の確保、リーダーの確保はどのようにしたか。
Ａ：その当時は、高砂さんと言うリーダーがいて、その後もＩターンの人達もいて、非常に観光業で雇用が増えたのを実感していた。現状としては、職員も減っています。町内外募集は行っているが、少ない現状です。人の問題は非常に頭が痛い。
リーダー育成は、また課題であると感じている。小さな島なので、情報がすぐ流れてしまって、良い情報も悪い情報も広まってしまいますので、地元の中では見つけにくいと思っている。最初は馴染むまで時間はかかると思うが、外から新たな視点のリーダー的存在が入って来て欲しい。行政・観光協会の職員が、地元の人間とつなぐことで育成、確保して行かなければいけないと感じている。

Ｑ：従事者の意思統一をどのように図っているのか、モチベーションをどのようにして達成、維持しているのか。
Ａ：採用時の面接で、小値賀の良さをどこに感じているのか、小値賀で何をやりたいのかを聴き取りし、この人なら小値賀のためになる、一緒に仕事が出来る、やって行こうと言う人を選んでいる。

Ｑ：観光による消費額の１０年間の推移とその主な要因について。
Ａ：県の出している観光消費額を見ますと、推移的には観光客が増えて来ると消費額も伸びているのかなあと思います。小値賀の人口は減っているのだけれど、交流人口が増える事で町内の消費額も増えてきている。

Ｑ：民泊のおもてなし活動状況と家族構成及び建物の改修状況について。
Ａ：家族構成は、ほとんどご家族で経営している。年齢構成は、高齢化もして60、70代、平均すると60代くらいである。今後課題として、新しい民泊をやられる、やりたいと言う人の確保。民泊も10年経っていますので、新しい民泊の確保と支援策が必要。例えば水回りの改修などの改修事業を、町としても支援をして行く制度を充実させ支援体制を取って行きたい。

Ｑ：小値賀町の財政状況の推移と国・県補助等の活用状況について。
Ａ：予算額30億前後で推移している。自主財源に乏しく、脆弱な財政運営でる。地方交付税ありきの状況がずっと続いている。
国県の補助事業は、平成25年から平成28年度にかけ、国の離島活性化交付金の創設当初から、交流促進の事業や定住促進の事業に取組んでいる。
特に離島流通効率化・コスト改善事業で、小値賀から本土に野菜、魚を送る海上輸送コストの支援事業。また、水産業に係わる藻場再生の事業を26年度から島内外のボランティアダイバーの方に泳いでいただいて、海の中の清掃活動をとおして交流を深めると言う事で国の事業も活用している。
新しいところで離島留学制度等調査研究事業と言うのも26年から3カ年行い。29年度には研究事業からモニター事業へ移行して離島留学へ向けた調査実践事業に現在取り組んでいる。
交流事業は、修学旅行の誘致にあたって、体験料の一部、一人当たり2,000円を小値賀に来ていただいた方に支援をする活動として、交流活性化事業（教育旅行支援事業）を行なっています。これについては、新しい交流観光メニューを研究して行こうと言う部分も一部含ま

れる。
今年度から国境離島新法がスタートして、航路運賃低廉化事業、輸送コスト支援事業、滞在型観光支援事業、雇用機会拡大事業を補助事業として行っている。

Q：離島と交通アクセス、連絡船による交通アクセスは、気象条件に大きく左右されると思い、集客に及ぼす影響とその対策について。
A：台風の場合は、船会社が欠航を早くに決断するので、修学旅行の予定が入っていると、1 週間くらい前から、ＩＴ協会の担当は学校との調整、船会社との調整に苦労される。最終的に小値賀に来ていただいて帰りの船が欠航したりすると、更に迷惑を掛けると言う事で、天気予報見て余儀なくキャンセルした例が有り、その場合非常に大きな影響を受けます。自然の気象条件によるキャンセルなので、キャンセル料が取れないと言う事で、準備はするけれどもＩＴの部分が無くなってしまう。かなり苦労をしています。
対策として、船会社が出ない場合は、船をチャーターしてチャーター船で対応した場合も有りました。しかし、観光客の事を考えると、小値賀に来るのはいいけれども、かなりお疲れになる。この辺が課題である。
町、議会、関係者が陳情に行きまして、九州商船が 30 年に高速船を、31 年にはフェリーを新造船に切替えるため造船に取り組んでいる。

Q：民泊は、大きく分けてホームステイと民宿に分けられるがどのような情報を活用して導入したか、また、その現状について。
A：簡易民宿、体験民宿でと言う事で、町も動いたし、議会も動いて、長崎県の方で規制緩和をしてくれた。ただ、団体に組織しないと民泊が出来ないと言う事で、おぢかアイランドツーリズム協会の民泊部会に所属しないと民泊出来ない現在の状況です。個人的には民泊やりたくても出来ない。
今後は、国自体が民泊の制度を見直す様な状況を踏まえ、制度に応じた体制をして行く必要がある。
また、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」（構成資産に小値賀町の野崎島が有る）として平成 30 年の世界文化遺産登録を目指していますので、そうなると、民泊を増やして行きたい。

Q：ホテルや旅館と民宿の共存方法、既存の施設との競合が課題となるが対策とその秘訣について。
A：既存の旅館等との議論は有りました。一部の方からは理解が得られず、感情的になった時期も有ったと聞いています。そう言う中でも、料金の差別化、客層の違い、と言う部分で理解を得られるよう説明を重た。時間はかかったようです。旅館とか民宿では最初はお客が取られると思って、いまだにそう言う部分は有るかなと感じている。

Q：商品価格は、集客条件の一つとされるがその設定方法について。
A：高額では有りますけれども、ガイドツアーも、他地域との差別化、小値賀らしい観光を進めるうえで、料金を 4,000 円プラス消費税と言う事で設定している。
確かに高いと言う意見も有る。それに納得して来られるリピーターの方もいます。やはりガイドの質によると感じています。見せるだけではいけないので、そこにストーリーを乗せて観光客を満足させるか、その部分の育成が料金の付加価値にもなると考えています。場数を

踏むことでお客さんの客層に合わせた対応の仕方など、ガイドの質を上げて行く必要があると感じている。

Q：おぢかアイランドツーリズムとの関係、観光は、宣伝による集客行為に始まり民宿や体験などの受け入れ行為を協働で為すことで成り立っていると考える。そこで、おぢかアイランドツーリズムとの協働について。

A：町自体が、観光の窓口はアイランドツーリズム協会に１本化して業務委託している。町に観光の話しが有った場合、基本はアイランドツーリズム協会に振って窓口１本にして宣伝もしております。
ただ、町おこしとして来られた場合や、取材に関してはケースバイケースで行っている。町を売り込むと言う時には、お互いに打合せをし、過大広告にならないようにと、何処を売りにするのか、事前打ち合わせをして対応をしている。

Q：町の魅力を以前はどのように考えていたか。

A：自然環境や、観光素材や、物産などを売りにしていた。

Q：現在は町の魅力をどのように考えているか、現在の町の魅力・売りを育てる手法は。

A：現在の魅力は、小値賀の生活そのもの、人、今まで営まれた生活の歴史。どこにも無いものと言えば、小値賀の島であり、そこに住んで居る人であり、そこに積み重ねて来られた生活の歴史や、先人たちがこの小値賀を守ってきた、その部分をいかに観光素材として行くかに変わってきている。

Q：住民に売れる町の魅力をどのように伝えたのか。

A：小中高一貫教育の中で、小値賀学として歴史の関係を、学芸員が中学生と小学生に歴史の部分の講座に言っています。教育の部分で小値賀の何が良いのか、何が魅力なのか、小さい時から植え付けと言いますか、それをして行かなければいけないと思います。
かーちゃんの会を通じた食育の部分で、小値賀町の生産物、生産に係わる農業者、漁業者の思いを伝えて行く。内発的な魅力、地元が元気であると外から見てもそのように感じる。地元に住んで居る人が小値賀に誇りを持って小値賀を語る様になって来れば、もうちょっと観光客も増えて来るだろうと考えている。

Q：町の魅力を再発見することで住民に変化は生まれたか。

A：おぢか音楽祭、女性の消防団、若い人のリッパカンパニーズ、自発的海岸清掃される、小値賀のイベントの時に他所から呼ぶのではなくて、地元の若い人で小値賀の課題となるものをテーマにして自分たちでヒーローショーをやる。そう言う動きは、合併の是非を問う自立の島で行くぞと決めた以降からは、そう言った動きはとくに出て来た。

Q：観光客が多くなって住民の生活には何か変化があるか。良い面、悪い面。

A：良い面では経済効果と、人が入ってくることで、いろんな話が聞け外の情報が入って来る。交流効果がある。人が入る事で町も元気になる。子供たちも、中高生が来ることで交流授業が生まれて、良い面だと思う。
悪い面ではゴミ問題です。あと課題は、受け入れ対策の問題。朝食、お昼の問題、宿泊の問題が浮き彫りになってきている。

Ｑ：経済効果を島外へ出さない為の、島内での経済循環の構築はなされているか。
Ａ：地産池消推進と言う面ではやっている。人口も減っていますし、大きな店舗は無いので、インターネットの普及なども有り、現状は外から購入する方も増えている。地元の商工会としても課題としている部分です。

Ｑ：フェリーは生活の路線、足ですけど、その場合、国の話が出ましたが、国の支援とか支援策はどんなことがありますか。
Ａ：離島航路補助事業と言うのが有りまして、赤字航路であれば、赤字については国と県で確か8対2くらいだと思いますが、100%補助をします。業者に運営費の補助をします。
しかし､1社の場合であって､2社になった途端にいま言った国の補助制度は打ち切る訳です。成り立つから2社でしょと言う訳です。
黒字路線の航路についても船舶を新しくするときには1割補助、全く出さない訳では無い。
また、赤字航路に対しても1割の国の補助が有って、あと9割は鉄道運輸機構と言う所からお金が非常に安いお金を借りれることになっていて､そこの9割分のお金を10年間で返して行きますが、その返す減価償却としてその全額をみるとなっているので、相当率の良い制度にはなっています。町の出費は無いです。

Ｑ：Ｉターン、Ｕターンの方が、140 何人、大きな力になっていると思います。Ｉターン、Ｕターンの人の居住への行政の支援と、生活になじむための助言と言うのかコーディネーターと言うのですか、町内会の人がバックアップすると言う様な、システムとまでは言わないですけれど、風土みたいなものはどの様ですか。
Ａ：一番問題なのは住むところと、仕事ですね。その2つの問題をクリアーしてやれば、来たいと言うのはニーズとして有ります。住む家については、25年に国の離島活性化交付金の制度が始まった時に、小値賀に有る県立の高校の職員住宅を町が買い取りそこを定住促進用の住宅で内装外装整備しました。ＵＩターン専用に整備したのも有ります。その制度を使って空き家を定住促進用の住宅に水回りを改修したりして、現在2軒整備し、今年度も2軒整備する予定です。また、町の方でも単独で空き家を改修する事業を上限額有りますが、空家バンク登録にした場合に支援が出来る制度も有る。
仕事の部分は、担い手公社と言って、農業研修を受け入れている。特にそこの農業研修生が人気が高まっている。いま定員いっぱいぐらいです。そこで2年間研修を受けて、1年くらい実践農場で実践やって、4年目ぐらいから自分で営農し始めます。
もうひとつ、総務省の地域おこし協力隊については、生活保障が月に16万ほど、給料以外に頂きながらその地域の応援が出来る活動が有り。最大3年間で、その3年の中でやりたい仕事を見出して起業された方も出て来ている。また、3 年プラス、前付けで、農業の場合は 1 年前に、農業の中でも色んな、野菜を作ったり、牛を飼ったり、色んな種類があるので実際にやろうと思うと3年では足りないので、町単独で色んな選択を出来る期間、研修期間を設けてやることで、残りの3年を自分のやりたい事を集中して技術を学ぶことが出来ると言う事で、町単独での支援もしている。
（立石議長）
・精神的なサポートですけれど。議会においてサポートセンター的な、総合的に相談を受ける窓口が必要だと議論しまして、屋久島でやっているその状況を調べた。民間の立ち上げで、行政が立ち上げている訳では無いと言うことだったです。だから、民間でやるのが筋

なのかなあと、行政側から言うとそう言う堅苦しい話しかないので。そう言う所から言うと民間をどうやってそう言う所に導くかなと言うのは議会としてのテーマで有ります。
議会の活動の中では、「議会と語ろう会」の中でＩターン者の人達を呼んで、何か悩みは無いか、或はこうやって欲しいと言う事は無いのか、と言う話を聞く事もやっている。その折に、上手く地域に溶け込むためには、『こう言うやり方をしてね』と言う話を議員の方からやっています。その折に議会としての姿勢、『何時でも良いよ、相談にいらっしゃい』と言うのを持ち出していると言うところです。
この間ももう３歳くらいになるけど、Ｉターン者に三つ子が生まれ、大変でしょ親が近くにいる訳じゃないから、地域の人が入れ代わり立ち代わり世話に来るんですよ、おそらく、人が良いんですよ、ただ訪れる観光客にだけおもてなしする訳じゃないのです。だからそういう人達の隣のおばちゃん連中が、『大変だよね一人で３人も育てるのはね』と言って、当番で来る時も有るんですよ。それぐらいの所でフォローされている。さっき言ったセンターを作らなくちゃねと言わなくても、出来ているのかなあと言うのは思ったりします。

（永田係長）

・町としても、年に２回くらいは、意見交換会と言う事で、来た方々のグループ、定住者の意見交換会とその後に懇親会をやっている。

【所感】

・小値賀のDMOの主眼は、島の人とのふれあいを通じての安堵感を来訪者に提供することにあるような気がする。それは、DMO導入の初めから意図されたものではないようで、事業を進めて行くなかから発生したものという感じを受ける。今、来訪者が求めているいわゆるもてなしと合致したと言うところであろう。
・民泊も移住も成果を揚げているのは、小値賀の住民の気質に負うところが大きい。隠れキリシタンの島ではなく、非社交的な閉ざされた島でもなく、開放された交易の場でもあったという歴史的から、人をよそ者扱いしないという性格が小値賀の人にはあるようだ。来訪者との接し方に飾りがなく、知人・友人に対するのと変わらない。
・DMOの成功は、やはり人材にかかっていたようである。決断する人、企画する人、実行する人、説得をする人等、適材適所の人選ができたことが大きい。また、首長だけでなく、議会・議員の積極的な働きも見逃せない。それをどう維持していくかが今の課題となっているようである。
・小値賀で感じたのは、その誘客が注目を集めることになったのは、客層を絞り、田舎の小さな島ではありえないイベント（例：国際音楽祭）を、今風に言うなら、サプライズができたことに起因しているように思う。何より大胆な決断を成し得たことこそ評価される。

茅野市での展開の可能性

・人、物（情報も含め）、金を何に如何に投入するか、その決断しか成功の要因はないのではないだろうか。決断していく大切さ。
・地域おこし協力隊員の制度を活用し、島以外の出身者による地域の魅力を再発見するとともにいかにしたらその魅力が産業と成りうるかを検討し、民泊や古民家ステイにつなげたことは、茅野市においても今後の新たな地域の魅力を確認し地域づくりに結び付ける上で、大いに参考にすべきである。
・離島と内陸、産業構成や自治体規模などの違いから、小値賀町の地域づくりをストレートに茅野市の活性化に結び付けることはできないが、先を見据えるリーダーが示す提案を、まずは関

係者が前向きに実施の可能性を検討する土壌は、見習うべきだと思う。

・観光協会、行政観光課等の組織の見直しが必要と思う。相互の連携を強くしていく事が大事と思う。

・事業の仕組み作りと体制を整備するために下記のことを明確にしていく必要がある。

① 物語やストーリー性をきちんと決める。

② 心に残る「茅野」が何であるか。･･･人情・歴史・自然・発展性・成熟度

③ 何か小さなことでもいいから全員（家族・友人・担当者・専門家等）が係る。

④ やること、やってもいいこと、やってはいけないこと、できること、できないこと等明確にしていく。しかしプラスαも大切な要素。

ＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会

- 調査項目

１．おぢかアイランドツーリズムについて
２．DMOの事業について

- 調査対応者

おぢかアイランドツーリズム　　末永 貴幸　氏

- 調査期日

平成 29 年 10 月 19 日　午後 3 時 15 分～午後 4 時 10 分

- おぢかアイランドツーリズムの概要

・スタッフは当初 13 名であったが、現在は８名（内２名は協力隊）
・印刷物やリーフレット作りから始まる。（島全体の紹介・商品企画・情報発信）
・業務時間は９時～１８時（ターミナル対応は６時３０分から）

- 調査目的

小値賀町において、DMO（観光を活かしたまちづくり）事業としてスタートしたおぢかアイランドツーリズムの事業を現地視察し、茅野市におけるDMO事業の参考とするため。先進地においての現状と課題を視察する。

- 調査内容

１、おぢかアイランドツーリズム・DMOの事業について
【おぢかアイランドツーリズムからの説明】（末永貴幸氏説明）

・平成の大合併の時に、小値賀は合併せずに進むと決めた時から、町は観光に力を入れて行く事を考えた。小値賀における観光の始まりである。
・小値賀、佐世保、博多を結ぶ海路でつながっている。海を隔てているので残されている、自然や人柄が観光で活かせるのではないか。昔から、捕鯨や廻船業で人の往来は有ったので、当該の人とのコミュニケーションをとることが自然とできる土地柄、人柄気質であった。
・観光協会（H17 独立）、自然学校(H12 発足)、民泊組織(H18 発足)、を平成 19 年に合併しＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会としてスタートする。
・観光資源としては野崎島の教会、アイランドツーリズムではそこにある、簡易宿泊施設の管理をしつつ安全管理も行っている。
・民泊は、平成 17 年に長崎県が宿泊施設の規制緩和をし、大分の方へ視察に行き小値賀のためになるのならと言う事で、平成 18 年から 7 軒の民家でスタートする。
・現在は、30 軒まであったが 23 軒に減っている。受入は半分の方が一般の方も受け入れを行っていて、後の半分の方は修学旅行等の子どもの事業の時です。
・民泊が注目を集るきっかけは、高校生のアメリカ国際親善大使、ピープル・トゥ・ピープル、が来られて、満足度世界一を 2 年連続した事でした。また、様々な賞を受賞した事が自信につながった。
・ここまでの体制では、個人・大人のニーズに応えられなかった。古民家ステイ、古民家レストラン、大人の体験プログラムを行う。また、株式会社 小値賀観光まちづくり公社（H22 設

立）を作りそこで旅行業の免許取得し島への旅のアレンジし販売できるようになる。

・旅行会社（公社）とＮＰＯ（おぢかアイランドツーリズム協会）とが両輪となって「おぢかアイランドツーリズム」を進めていきた。H28 年に管理部門を効率化し事業に専念できる体制を作るため、ＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会に組織と事業を一本化した。

・仕事はホームページやリーフレットを刷新した。具体的には小値賀島旅サイト、野崎島サイト、古民家ステイサイトに分かれていたのを一本化した。スマートフォン対応、コンテンツ拡充、ＳＮＳ連携等もある。

・島旅コンシェルジュ、島のワンストップ窓口として島全体のご案内、ご相談、商品提案を行う。

・広報・営業活動として、独自パンフレット作成、メディア対応。Facebook やホームページなどＷＥＢ発信。旅行会社、各団体への営業活動がある。

・島の人も、以前は「何もない島に来て何が良いんだ、」と思っていた人もいたが、レンタサイクルなどで回られる方を見ると、「小値賀は良いのだ」と思う方が増えて来て、地域への自信をとりもどして来ている。

・ここ 10 年で延べ 300 人を超えるＵＩターンの方が、観光だけでなく農漁業、商業、役場などまちづくりの担い手となっている。出生数も一桁に落ち込んでいたが平成 27 年には 15 名に上昇傾向になった。

・持続可能な島であるために、「小値賀らしさ」を大切にし、若者が暮らせる島を目指している。

・「心に残る島 おぢか」を、島に住む、島を訪れる、多くの人々とともに再生し、未来に残し、伝えて行きたい。

【質疑応答】（末永貴幸氏回答）

Ｑ：小値賀町からの支援事業ですが、維持管理費ですとかどのくらいの割合か。

Ａ：古民家に関しても、これは町の持ち物で、ＩＴ協会が委託事業として受けていて、費用は一切発生していなくて、お客様からいただいた料金がそのまま入って来て、収入のある程度が修理費として出して、それ以上かかる場合は、町の方と相談と言う事になっている。

Ｑ：儲けのプラスが出た場合の処理はどの様になっているか。

Ａ：プラスになったのが昨年くらいです。台風の影響が無くお客さんが来れて、また、修学旅行も 8 校ほど来て。過去を見ても 1 番良い成績だった。それまでは無かった。委託業務を受けながらですので、野崎島簡易宿泊施設の運営の方ですとか。黒字になっても、他の方でと言う事になる。

Ｑ：協力隊員は何名か。

Ａ：8 名の内、レストランの方は 2 名で、6 名が事務所の方でやっている。その内の 1 名は野崎島の方の管理をしていますので、実質 5 名体制で事務の方をしている。

Ｑ：町からの人件費対応はどうですか。
Ａ：13 名いたころに比べれば人件費削減になっている。ワンストップ窓口と言う面でも委託料としていただいていますが、人件費分までは出ていないかと思います。

Ｑ：ＮＰＯ法人の法人格の中には町の方は参画しているか。
Ａ：立ち上げて当時は、理事の方に役場職員の方に入って頂いていましたが、今現在は商店の方とか民泊の方に会員になって頂いて理事になって頂いている。会員の中に役場で仕事されている方もいる。役場の方とは、相談しながら進めている。支援については町の方からも予算編成の時期ですとか、実績の分かるものを付けてと言われている。

Ｑ：小値賀島の観光はＮＰＯがやっていると言う事なんですよね。役場の方で聞いた時、案内もすべてＩＴさんの方に振っていると言っていましたので。
Ａ：そうですね、ワンストップ窓口と言うのも有ってその辺もやっている。

Ｑ：役場の方は、ハード面だけなのか。
Ａ：そうですね、ただ、役場の方にも観光方面の問い合わせは有りますし、役場で対応しきれないとき、対応してくれないかと連絡来ます。取材とかですとか。

Ｑ：町おこし、地域おこしと言う観点からだと、役場の方が対応して、それ以外の観光客の受け入れの方は全てやっていると言う事ですか。
Ａ：そうですね。

【地域おこし協力隊の実情】
町民の感覚では、町が募集した地域おこし協力隊員の定着状況は少ないとのことでした。
尚、視察資料によると 227 名がアイターンし、150 名が定住。
定住は、思うような収入を得られる仕事を探せるかどうかにある。

【所感】
・観光産業のほとんどなかった離島において、島の観光資源となるものを見つけ出し、その活用方法と進むべき島の方向を見出すとともに、住民にいかにしたら、従来までの漁業を中心とした第１次産業だけに頼るのではなく、地域資源を生かした地域づくりを実践した事例として参考になった。

- 茅野市での展開の可能性
・茅野には顧客の求めているものはあるのだろうか。なければ、創造するしかないのであるが、ここで今一度、茅野は観光をまちづくりに組み込むのか、観光でこれからもいくことができるのかを考察する必要があるように思う。
・「おもてなしの心」を学ぶ機会を作って、講演セミナー等で勉強する。
・観光、宿泊、買い物の集客数を上げる為の工夫をどうしていくかを議論して知恵を出し合っていく。
・無から有を生みだした小値賀町にくらべれば、茅野市の方が観光資源が多くあり、都市圏からのアクセスもはるかに良いので、自信をもって考えて、持続して行く事が大事ではないかと思

う。

・継続できる事業にするため次のことが必要と思える。

①すべてボランティアだけでは無理が来る。

②後継者が興味を持ち、好きになるような事業にしていく。

③今のままの良さを売り物にしていくのが筋だとは思うが、必要なものは新しくしたり、この事業ために手を加えなくてはいけない。進化させていく。(例：水回りはやはり今時の水準レベルは必要)

・公社等の組織を作る場合

①将来性や費用対効果は、育てるものと理解した上で、組織として「何ができる」、「何を利用してもらう」を明確にすることが大切。

②地域に利用してもらえる会社であること。

③公益の部分がある場合、自立できるまでは行政からの人材派遣、委託費としての支援ができる裏付けが必要であると考えられるが、いずれは行政に頼らない企業感覚での経営であること。

民泊

- 調査項目
  １、おぢかアイランドツーリズムの事業「民泊」体験

- 調査対応者
  おぢかアイランドツーリズム　　末永 貴幸　氏
  宇戸家（甚助の宿）　　宇戸 靖代　氏
  山田ヨシ子家（きよすみ）　山田 ヨシ子　氏
  中村家（珠々）　　中村 信子　氏
  横山家（お富）　　横山 富代　氏

- 調査期日
  平成 29 年 10 月 18 日　午後 6 時 00 分～翌日午前 9 時 00 分

- 「民泊」の概要
  ・小値賀町の民泊は「長崎県農林漁業体験民宿推進方針」に則り、旅館業法や消防法の規制緩和を受けて実施が可能となったもの。
  ・民泊の実施者は「おぢかアイランドツーリズム協会」の会員になること。
  ・利用者の予約受付や利用料の収受は「おぢかアイランドツーリズム協会」が行う。

- 民泊体験
  多くの民泊を体験して学ぶ目的で民泊先を分け、２人づつ受け入れてもらうことにし、8 名で４軒に宿泊することとした。
  ターミナルにてアイランドツーリズム末永氏により各民泊民家さんを紹介され、各民家へ別れる。

【宇戸家（甚助の宿）での状況】
・民泊を始めてよかった、町が元気になったとの話に加え民泊状況は、修学旅行が入ると忙しいが、季節によっては週１回、月１回程度と話していた。
・ご主人から、海底から引き揚げた大きな火山弾（現在は運び出し禁止）や碇石の実物を見せてもらい、噴火の力や漁業に於ける工夫の話を聞くことができた。
また、島では水が不足していて水田に入れる水に料金が発生するとの話があり、離島が故の水環境を感じた。
・民泊受け入れ側の日課は、午後受け入れ準備と夕食の準備、家族と夕食、食事の片付け、布団敷き、朝食の準備、朝食、朝食布団の片づけと主婦にかかる負担が多いことや生活空間に客を泊めることの心的大変さを感じた。
・先ずお茶と自家製の茶菓子をいただいた。早くに着くと勘違いをして作っていた、それだけ歓迎の想いが伝わりうれしく感じた。お風呂は広く清潔で、タオルと垢こすりも用意してあった。浴槽は大きく、足を伸ばしてゆったり入れる大きさ。夕食は、大きなテーブルに心づくしの料理でいっぱい。天候が悪く数日漁に出ていないとの話だったが、刺身を始め海の幸

が様々な調理法で並べられ、とても食べきれない。全員で食卓を囲んでの団らん。民泊を始めてとても楽しく、生きがいを感じてやっておられるのが伝わってきた。非常に生き生きとして暮らしておられる様子は天職のように思われているようにも見受けられた。息子さんも話好きで夜中過ぎまでテーブルを囲んで話が出来た。家は、風呂とトイレに大きく手を入れているようだったが、それ以外は元のままのように感じた。

【山田ヨシ子家（きよすみ）での状況】

・民家の方が島の地域おこし事業をよく理解し、島の魅力や郷土食のおいしさなどをアピールしている所は非常に感心した。
・民家さんの話しで、小値賀の民泊は、民泊先の人から何か特別なことをしてもらうのではなく、民泊先の人と日常を共にするということのようである。また、民泊受け入れ先の独自の体験メニューもあり、連泊しても毎日変わった体験ができることが、民泊受け入れの条件でも有るようだ。

【中村家（珠々）での状況】

・午後６時中村さんを紹介され。中村信子さん運転で斑島の家へ向かう。日も暮れて外の様子は見えなかった。道中、島の説明を受ける。民家到着後、御主人、息子さんと懇談しながらの夕食をとる。通常であれば、ここで夕食の手伝い等行うが、夕食の中で民泊についてのお話しをお聴きした。
・多岐にわたってお話しされたが、気兼ねなく受け入れ、話が出来る。また、島の話しが色々とできる雰囲気に感心した。
・翌朝、御主人が家周辺の状況を散歩しながら説明される。空家が多いとの話しであった。
・民泊がテレビで取り上げられていたビデオを見ながらお話をお聴きした。

【横山家（お富）での状況】

・民泊は人が来ると時間は食われるし大変。でも現金収入は魅力である、ボランティアでは長続きしない。
・外国からも来ている、昔から開港の文化があり、人が来ることには抵抗なく、島の気質になっている。

【調査内容】

・民泊には、何かしらの体験を入れるようになっている。単なる宿泊ではない体験型宿泊ということになる。民泊先の方の話であるが、小値賀DMOの民泊は、民泊先の人から何か特別なことをしてもらうのではなく、民泊先の人と日常を共にするということのようである。小値賀の産物を材料に一緒に料理をし、おかずにするために魚釣りをし、あるいは港に調達に行く。同じ材料は使っても同じ料理は提供しない。体験には、DMO側のプログラムもあるが、民泊受け入れ先独自の体験メニューもあり、連泊しても毎日変わった体験ができることが、民泊受け入れの条件でもあるようだ。
・民泊料を生計収入の主としていくことは難しいし、採算が取れないこともあるらしい。しかし様々な方たちとの出会うことが楽しいし、仲の良い友達のような付き合いができることが嬉しいから民泊をしているということのようである。お客と業者という付き合いではない。でも、始めたころは面倒くさかったが、今は、それがために続けているとのこと。お金のためであれば、継続は無理だろうということも言っていた。

・お金に重きをおくようになると、DMOに支払う手数料欲しさに、DMOを通さずに、直接リピーターを受け入れるようなり、もてなしが商売のもてなしとなり、また、小値賀DMOの目指す民泊ではなくなるという意識のようである。
・リピーターの多い民泊先は、他からねたみをかうこともあるようである。そこをどう息抜きさせるかは、民泊受け入れ先同士の意思疎通も含め、DMOの手腕ということのようである。
・民泊成功には、修学旅行誘致、内外の口コミ・マスコミ取材による宣伝がある。時代の要請にあった民泊内容が提供できたということである。
・小民泊といって、宿泊はせず、食事をするだけのプランもある。ふらっと知人宅を訪れるつもりで利用ができるという。古民家・小民泊の組合せもできる。
・『民泊を始めてよかった。町が元気になった。』との話に加え民泊状況は、修学旅行が入ると忙しいが、季節によっては週１回、月１回程度と話していた。
・主人から、海底から引き揚げた大きな火山弾（現在は運び出し禁止）や碇石の実物を見せてもらい、噴火の力や漁業に於ける工夫の話を聞くことができた。
・島では水が不足していて水田に入れる水に料金が発生するとの話があり、離島が故の水環境を感じた。

【民泊の現状】

農家民泊は、茅野のホットステイに宿泊を加えた取り組みと言える。

民　家　数　　３０戸から２３戸に減少
受け入れ状況　　修学旅行が入ると忙しいが、季節によっては週１回、月１回程度とのこと。
料　　金　　@8,000円食事付き　内2,400円（30%）がツーリズム手数料。
開業のコツ　　民家に客を泊めるには、奥さんや家族の合意が重要。
客間が必要、家財の管理対策が必要、近所への説明
風呂、トイレの改修

【所感】

・島での過ごし方として、島の暮らし方を体験し、小値賀島らしい島の話しが出来る民家さんがやられていると感じた。
・民家さんの引合せは、港にあるツーリズムで行ったが、島への出入りが港ひとつであるので、時間的にも船便にあわせてそれが出来ると感じた。予定を早朝のフェリーに変更したにもかかわらず、各民家さんは、ご夫婦でお見送り頂いたことについてもそう感じた。
・民泊受け入れ側の日課は、午後受け入れ準備と夕食の準備、家族と夕食、食事の片付け、布団敷き、朝食の準備、朝食、朝食布団の片づけと主婦にかかる負担が多いことや生活空間に客を泊めることの心的大変さを感じた。

- 茅野市での展開の可能性

・民泊を経験して、民家の方が島の地域おこし事業をよく理解し、民泊などで島の魅力や郷土食のおいしさなどをアピールしていることには非常に感心した。やはり、住んでいる地域を愛し誇りを持つとともに大切にする気持ちが重要であり、茅野市での地域おこしにおいても参考となった。また、それには地域の歴史や文化、住民気質などをよく知っていなければできないことであり、宿泊やガイドなど関係する業務に携わる者の求められる視点となる。

古民家ステイ

- 調査項目
  １、おぢかアイランドツーリズムの事業「古民家ステイ」体験

- 調査対応者
  おぢかアイランドツーリズム　　末永 貴幸　氏

- 調査期日
  平成 29 年 10 月 19 日　午後 3 時 30 分～翌日午前 7 時 40 分

- 「古民家ステイ」の概要
  ・小値賀町が所有する古い民家を改修し宿泊施設としたもの。
  ・東洋文化研究者のアレックス・カー氏の『町内に残る古民家を改修することで新たな観光資源となる可能性が高い』と語ったことに端を発した。
  ・京都の先行事例の調査や研究をしてきた。
  ・国土交通省と農林水産省の補助事業と過疎債等を利用した。
  ・現在、古民家レストハウス１棟、古民家ステイ４棟がある。
  ・更に、古民家レストランの１棟ある。

- 調査内容

【古民家ステイの状況】
・比較的大きく造作した古民家を改修している。
・改修は、風呂、トイレ、台所、壁、床、空調。照明に施されている。
・古民家は、空き家を町が買い取り、古さを特徴とするコテージ風に改修を行った後にＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会（スタッフ１３名）にその運営を委託し、運営費は、古民家宿泊代金を充てているとのこと。

【古民家鮑集の現状】
比較的大きく造作のしっかりした古民家を改修し、和風のコテージとして売り出していた。
改修は、風呂、トイレ、台所、壁、床、空調、照明に施されていた。
受け入れ人数　１泊６人。
料金@12,000　自炊・・価格は既存のホテルや旅館とすみ分けた。

【所感】
・古民家に泊まってみたいという人がいるのは確かで、ブームでもある。小値賀のDMOは古民家宿泊を始めて、黒字経営となったと民泊先の人から聞いた。
・いくつかの偶然が重なり、古民家を町が取得、高額宿泊料方針決断へと至ったことを聞いた。なによりも大きいのは、町の決断であったと

いうように受け取った。決断時とは今は異なる意識が町に働いているようであるが、DMOや携わる住民の意思を後退されることにならなければいいと思う。組織の舵取りをする者の姿勢は欠くことのできない要素であろう。

・小値賀は、かつては交易で栄えた地で財をなす者があり、ただ古いだけの家ではなく、お金をかけたつくりの家が建てられた。歴史を感じさせる豪華な、それでいて生活の匂いのある家に商品価値があるし、一度は泊まってみたいと思わせる。
・素泊まり・自炊は、貸別荘も同じであるが、また訪れたくなるのは、貸別荘とは違い、その地の人とのふれあいがあるからのような気がする。
・富裕層をターゲットに高価格路線に恥じないよう、改修がされている。
・清掃、メンテナンス等きちんと実施されていると思われる。

- 茅野市での展開の可能性
  ・古民家民泊を開業する場合に検討していく内容
    ①古民家を行政が手配し改修するか、民間が手配し改修するかの判断
    ②行政が関係する場合、運営体制と係る経費とその財源のあり方

小値賀町議員・茅野市議会経済建設委員会所属議員意見交換会

- 調査項目
  １、議会対応について

- 調査対応者

小値賀町議会議員	議　長	立石 隆教	氏
	副議長	宮﨑 良保	氏
	議　員	横山 弘藏	氏
	議　員	浦　 英明	氏
	議　員	土川 重佳	氏
	議　員	末永 一朗	氏
	議　員	松屋 次郎	氏
	議　員	今田 光弘	氏

- 調査期日
  平成 29 年 10 月 19 日　午後 4 時 30 分から午前 7 時 30 分

- 小値賀町議会の概要
  ・議員定数：8 人　全員が無所属
  ・議会の運営について：平成 29 年 4 月 30 日から通年会期制を開始

- 調査目的
  DMO立ち上げ時の議会の状況と現状
  議員意見交換

- 調査内容

【DMO立ち上げ時の議会の状況】

・以前の観光客は０に近い数で、有ったとしても年間 1,000 名以下だった。議会全体がDMOに係わった訳ではない。
・現在、民泊を議員の半数がしています。そういう形でも関与しています。また、アイランドツーリズムの理事会に入って参画していた議員もいました。
・議会としての取組として、観光に船舶交通の問題どうするかとか、そう言った形の支援策というのは積極的にやっているとのこと。

【所感】

・人をつなげる、意識を変える、手助けをする、決断をする。こうしたことがしっかりと出来ていると感じた。航路の船の更新に関しても、国とも掛け合い、航路会社とネックになる心配を取り払う決断をしている。現在も、移住者との語る会を開催して意見の収集にも力を使っている。活発な活動が目に見える形として学ぶことが出来た。

- 茅野市での展開の可能性

・DMOが軌道にのるには、行政の支援が欠かすことはできないと感じたが、茅野市には議会にはそれが果たして出来るのか懸念も感じた。DMOに有能な人材を招くことができても、DMOと行政は共に観光事業を進める関係である以上、行政・議会の役割は大きな影響をDMOに与えることになると考える。

・シティプロモーションという考えがある。行政はDMOをこのシティプロモーションの考えの中で位置づける必要がある。DMOもまたこのことを理解する必要がある。茅野市では、このシティプロモーションの理解が遅れているような気がする。観光はDMOに任せるというと聞こえはいいが、責任逃れとも言われかねない。DMOの立ち上げに際しては、もっともっと議論が望まれる。議員もその勉強をしなければならない。

まとめ

全体総括

1．体験型観光の経緯を見ると、大事な分岐点で必ず大きな判断をしている。しかも、強い思いを持って地域全体で、それを実現してきている。同時に、実現のために国内外を問わずに学びに出ていき、学んだことを小値賀に適した形をして出すことが出来ている。対象とする規模や手法など先進事例を学ぶことが大事なことであると改めて実感できた。そして、その知識を柔軟に生かす発想が出来る人物を掘り起こし、起用し、実践することが成功のカギを握る。人材発掘、人材育成に力をそそぐことが茅野市の観光を動かす原動力になると考えられる。

2．茅野市には歴史の長い観光地が点在し、そこにＪＴＢや農協観光を含め数々の旅行業者や宿泊業者が関係し、しのぎを削っている。

観光組織の歴史は、茅野市観光連盟を茅野市観光協会に改名し現在に至っている。次の計画は、協会を吸収する形で一般社団法人「ＮＰＯ観光まちづくり公社」を立ち上げる計画が進んでいて新たな可能性を求めるという観点では期待できる。

茅野市の民泊は、蓼科や白樺湖の宿泊施設が不足したとき民宿として栄えたが一時しのぎ的な起業となってしまい現在は姿を消している。

近年の民泊は、一部の都市でインバウンド観光客の宿泊施設が不足したことからその対応策として取り入れた宿泊施設対策であり、地方では農業体験など農家民泊を売りに進められていて地方の活性化に取り組んでいる。

今後、民泊に携わる関係者の生計のウエィトの研究や行政の支援に対するその費用（人材含む）の調達方法の確認や費用対効果及び将来性を確認していくことも重要と考えられる。

今、茅野市が進めている茅野版DMO推進計画は、小値賀町の取り組みとほぼ同じと感じ、地域性をいかに生かすかが成功のカギとなる。

3．茅野の観光の売りは、豊かな自然である。豊かな自然それだけは売れない時勢であるように思う。テレビ等では、こんな場所に何をもとめて観光客はくるのかと不思議なことが最近多く見られるようになった。何を売りたいかではなく、客の求めているものは何かというドラッガーの指摘を痛感する。客は不必要なものにお金を払わないということである。求めているものは何かを見極め、求めているものはこれでしょうというアピールが必要である。観光事業も行政運営も企業経営と同じであり、顧客の創造ということであると思う。

以上